

20 周年にあたって

日本農薬学会設立 20 周年に思う

江 藤 守 総

国際農薬化学会議の日本開催にむけて、日本農薬学会の設立のため、故見里朝正氏が東奔西走され私が在職していた九大農薬化学研究室にも説明に来られたことを思い出す。氏の努力が実って 1975 年秋、東京で設立総会が開催された。このとき、特別講演に外国から著名な講師を招きたいとのことでカリフォルニア大のキャンダ教授の招待を提案し実現した。それから 20 年、この度、本会創立 20 周年の慶事にあたり、同教授が功労賞を受賞され、記念講演をされるのは誠に喜びに堪えない。かねてより見里氏が本学会にも国際賞を設けたいといっておられたが、これが契機になればさらに喜ばしい。会員相互の情報交換・切磋琢磨の場を提供するのが学会のもっとも重要な役割だと思うが、得られた成果を外に公開し、国際交流を進め、一方では啓蒙活動を行なうこともまた重要であろう。これらの点についてこの 20 年間の私の乏しい経験から思い出すままに述べたい。

1977 年に第 10 回農薬科学シンポジウム福岡開催の依頼を受け、東京で開催の IUPAC に出席予定であったシルバースタイン・フクト両教授らを招いて組織した。実際には、シルバースタイン教授は来日できず、急遽丸茂現会長に交代していただき助かった。海外の講師は来られなくなる場合があることはその後も経験した。開催前日、九大構内に農薬科学シンポジウム糾弾のビラが撒かれ、会場を九大から急遽市内に移すはめになった。会場にも反対派が押し掛けたが、彼らにも発言させて無事に会を終えたのも懐かしい思い出である。これに懲りて、次に担当した福岡大会は市内施設を当初より計画した。社会的反農薬の潮流に抗して奮闘された見里氏を思い起こす。私が会長の頃（1989～1991 年）もっと正確に農薬を知って貰おうと、当時の副会長満井氏と武居氏が中心となり“農薬と環境と安全性シンポジウム”を各地で行なうことになった。

わが国農薬研究者の本格的な国際交流は、本学会設立前の 1967 年に福永・キャンダ両先生がそれぞれ日米の

代表者として、日光で開催した日米科学協力農薬セミナーあたりから始まったと思う。学会設立後、1982 年京都で国際農薬化学会議が盛大に行なわれた。この年、本学会独自の国際的事業として見里氏が力をいれた日中農薬学術交流が始まった。第 1 回杭州交流会で指名された 7 名のなかに私も入っていて、以来欠かさず参加している。1990 年の西安での会で、次は 1992 年福岡でと決まり実行委員長を務めた。ご指導いただいた見里氏が直前に急逝されたのは痛恨の極みであったが、1994 年、中国黄山での会に見里夫人が招待されたのは素晴らしいことである。学会誌の国際化も、当時の編集委員長 高橋氏の努力でエルセビア社との提携が行なわれたが、中断したのは残念であった。

キャンダ研に留学していたときから気になっていたスターンバーグの昆虫神経活性物質が、カイコを材料にして L-ロイシンとわかり、この知見に五員環状リン酸エステルの異常に高い反応性を結びつけて、殺虫性五員環状アミドリリン酸エステルがみつかった。農薬学会誌に投稿した速報がおもしろいと、1981 年当時の見里会長から日本農学賞に推薦され、自ら選考会で説明して下さった。この年の夏、中島先生が米国化学会のバーディック・ジャクソン農薬研究国際賞を受賞され、私も記念シンポジウムで講演する光栄を得た。1986 年に宮本博士が同賞を受けられたときも講演させていただいたが、1994 年春、呼称は変わったが思いがけずこの国際賞をいただくことになった。これもキャンダ先生や研究を支えてくださった人々のお陰である。続いて同年秋には藤田氏が受賞された。わが国の農薬研究のレベルが国際的評価を受けた訳で、誠に喜ばしい。

私は 1993 年九州大学を停年退職し、現在都城工業高等専門学校長として、農薬研究から離れているが、農薬が正當に評価され、本会がますます発展することを祈念する。